

日本現代文學

全集

90

石川淳
坂口安吾集

日本現代文學全集 90

石川 淳
坂口 安吾
集

講談社

日本現代文學全集

90

石川 淳・坂口安吾集

編 集
伊 藤 整
龜 井 勝 一 郎
中 村 光 夫
平 野 謙
山 本 健 吉



初版 第1刷

昭和42年1月19日

増補改訂版 第1刷

昭和55年5月26日

著 者 石 川 淳
坂 口 安 吾

發 行 者 野 間 省 一

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽 2-12-21

郵便 番 號 112

電話東京03 (945) 1111(大代表)

振 替 東 京 8-3930

裝 幀 墨 江 征 治

印 刷 大日本印刷株式會社
製 本 株式會社若林製本工場

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします
Printed in Japan

0395-106905-2253 (1)

(文1)

石川 淳 集 目 次

卷頭寫眞

筆 蹟

佳 人……………七

山 櫻……………三

マルスの歌……………七

張柏端……………元

燒跡のイエス……………三

かよひ小町……………五

鷹……………四

鳴 神……………六

八幡縁起……………二二

都々一坊扇歌……………四〇

文章の形式と内容……………一四七

短篇小説の構成……………一四

虚構について……………一七

鷗外覺書……………一七〇

太宰治昇天……………一九一

ジイドむかしばなし……………一九六

安部公房著「壁」序……………一九九

安吾のゐる風景……………二〇一

六世歌右衛門	二〇八
讀まれそこなひの本	二〇九
坂口安吾との往復書簡	二一五
作品解説	平野 謙 四一六
石川淳入門	奥野健男 四二三
年 譜	四二九
参考文献	四四五

坂口安吾集 目次

巻頭寫眞

筆 蹟

木枯の酒倉から	三三
風博士	三三
逃げたい心	三六
紫大納言	三八
古都	三七
眞 珠	三七
二流の人	三九

白 痴	三四
-----	----

戀をしに行く	三八
--------	----

私は海をだきしめていたい	四〇
--------------	----

櫻の森の満開の下	四四
----------	----

保久呂天皇	三七
-------	----

文學のふるさと	五六
---------	----

日本文化私觀	五九
--------	----

墮落論	六三
-----	----

デカダン文學論	六七
---------	----

麻薬・自殺・宗教	七三
----------	----

長崎チャンポン	八二
---------	----

砂をかむ	四五
------	----

作品解説	平野 謙	四九
------	------	----

坂口安吾入門	奥野健男	四六
--------	------	----

年 譜		三七
-----	--	----

参考文献		四六
------	--	----

石
川
淳
集

ドストエフスキの国とれたる
大宰のほろりま

一九六四年十月
ヒートングランド

字ふ人やと
秋深し
来

佳人

わたしは……ある老女のことから書きはじめるつもりでゐたのだが、いざとなると老女の姿が前面に浮んで来る代りに、わたしはわたしはと、ベンの尖が堰の口でもあるかのやうにわたしといふ溜り水が際限もなくあふれ出さうな氣がするのは一應わたしが自分のことではちきれさうになつてゐるからだと思はれもするけれど、じ

つは第一行から意志の押しがきかないほどおよそ意志などのない混亂におちいつてゐる證據かも知れないし、あるひは單に事物を正確にあらはさうとする努力をよくしえないほど懶惰なのだといふことも知れない。まつたくそのとき坂の上に立つたわたしといふものは、いかに頼みがひのなささうなでくのぼうの恰好で、ふらふらと風に吹き飛ばされながら斜面をずり落ちて行つた。まばらな雑木林が初秋の日ざしをさへぎつてゐるこの徑は、坂とはいひながら附近のすべての坂とおなじくただ緩やかな傾斜をなしてゐるだけのもので、頃合な散歩道になつてゐた。もつとも土地のひとびとは耕作や錢勘定に壓倒されてゐて宛もなくうろつくひまなどありはしないのだが、わたしはその閑寂につけこみをやり坂のあたりにさまよひ出て句でもひねるよりほかに手がなかつた。しかしこの日わたしはある興奮——その愚かしさを諸君はやがて知るであらうが——にいつぱいになつて、氣もそぞろに足を浮かせ、あたかも籠に盛り上げた林檎をこぼすまいとして驅け出す子供のやうに感動をちつと抱きしめてかへりをいそいだ。かうして家の庭さきにたどりつ

いたとき、そこにゐたユラの顔を見るやもう我慢しきれず、自然と聲が上ずつて、

「おい、たうとう發見したよ、臍を、問題の臍をね。やつとつかまへてやつた。大發見だ。」

ユラはきりと小鼻をつめたく光らせてただけで向うをむき、掃き寄せた木の葉など捨てるのであらう、裏手のはうへ廻つて行つた。ばたりばかりと引きずる庭下駄に足の裏がしらじらしかつた。もともどんな興奮をもわたしとともにしがたいユラなればこそ、わたしはつまらぬことに興奮する羽目に落ちたのではなかつたか。うつかりはしやいで見せた後の苦澁はむしろ安心に似たものでさむぎむと氣持がしづまり、わたしは縁側からあがつて疊の上に寝ころんだ。

ある寺の離れを借りてわたしとユラとがいとなんでゐたこの假住居は東京の東北にあたる田園の片隅にあつたのだが、他の方角の郊外が日ごとに開けて行くのにこの側は依然として大東京とは名ばかりの鄙振ひんのまま置きざりにされ、しかもその郊外から川を二つ三つ越えたこのあたりにはいまだに草深いけはひが残つてゐる。ただしそれは素朴な土の香ではなく近在者の狡こさせせこましさにみちたもので、その氣質がまた地形なり風景なりにそっくり出てゐる。仰ぐべき山岳の姿など見あたらずとももちろん、眼路のかぎりにひろがる曠野のけしきもなく、ここではただいくつもの菱形の地面が、そのうへに畑あり杜あり人家のあるいびつな雜段が不恰好に積み上げられ、それが山の形にまで高まらうとするとたんなりものかの大きい手が容赦なく頭からぎゅつと押しつぶしてしまつたのだ。武藏野では一點に立つて限なく見はるかす高みとてはないにしても諸君の立つ任意の地點がをりをりの展望の中心になりうるであらう。しかしこの土地ではそのやうな地點をさへどこに見出さう。どの點に立つて見てもひとはいつも片隅にしかゐない。この行儀の悪い腹の上に臍——たはむれにさう呼んだのだが——を探すことは容易なわ

ざではない。第一そんなものがあるかどうかとも判らないながら、わたしはぜひそれを探し出して見ようと夢中になつて……だがいつたいどうしてかかるばかばかしいことを思ひ立つたものだらう。元來山川草木には無縁のわたしなのだから、もしそれが退屈しのぎの氣まぐれであつたとしたらばやがてますます退屈になるほかはなかつたはずであるのに、この探索のあひだわたしは憑かれたもののやうに變化もない土地の上を馳せめぐり、いかなる崖のふち杜のはづれでもまだ見残してゐた場所があるといちいちそこに行つてみづから展望をたしかめ、そしてすぐ失望して立ちもどつて、やはりいたづらなる跋涉をつづけたといふのはどうしたことであつたか。それは欺されつつ探さなければならなかつた魅力がわたしの鼻づらを引きまはしたのだ、つまりあらうとも思へないものに自分をあてはめようとした愚かしい努力だといつて後にわたしは自分に説明をあてへる段どりになるのだが、そのときのわたしがたいして氣になかつた詮議だてをこで早手廻しに捏ねかへしはじめることはちと性急であらうと思ふ。わたしのはなしにたねや仕掛があるとしたならばそんなものは劈頭から底を割つてしまつたはうがわたしも氣が樂なのだが、ただ一氣にぶちまけることばの混雜が畢竟なにも語らないといふ結果になることを惧れる。簡單にいへばユラがいつもわたしに投げつけた惡態のやうにすべて《氣ちがひ》じみた眞似である。もつともそんな眞似をはじめたからユラがわたしを氣ちがひ扱ひし出したのか、氣ちがひ扱ひをされはじめたからわたしもそんな眞似をして見せる仕儀になつたのか、そのくぎりはひどくぼんやりしてゐるのだが、それよりもさしあたり、どうして臍を發見するに至つたかみじかい文句で臍のつくこの目の散歩のはなしを早くすませてしまふほうが便宜であらう。

わたしの發見はひどくあつけないものであつた。この朝わたしは一里ばかり先の丘の上まで行程を伸し、そこから今はもう知り盡してしまつた道の一つに沿つて立ちかへつて來た。やがて緩い崖に臨

んでゐる徑の曲り角にさしかかつたとき、持主はどこへ行つたものか、そこに一頭の牛がぼつんと置き捨てられてゐるのを見た。牛のからだが道幅いっぱいひろがつてゐるので、わたしはそれを迂回しようとして崖の角に盛りあがつてゐる土の部分のはうへ歩みをうつし、そこに深く根を張つた松の木の下に立つた。松は崖のそとへ太い幹をぬつと突き出して宙によこたはり、その幹はすこし先のところまで二股にわかれ、岐れ目がひとの跨れるやうなうねりをなしてゐた。わたしは何の危険もなくそこまで傳つて行けると思ひ、すぐそこに行き、幹にまたがり枝につかまつてからだを傾けたとたん一瞬にしてわたしは全景を領してしまつた。前に述べたごとく難段型に積まれてゐる地面のちやうど中程に挟まれた菱形の角に、たまたまこの崖が相當してゐたものか、わたしはその地點の上にわが身をななめに立てることに依つて景觀をはずに切り取りあとはただその斷面の上にわたしの首をちよつと突き出せばよかつた。かうして崖より上方の難段も高すぎる山岳とはならず、下方の難段も深すぎる谿谷とはならず、畑と杜と人家のさざなみのなかにわたしはただよひはじめた……

その興奮も疊に投げ出した四肢からいつか脱けうせて行つた。

——いつたい何が中心なのだ、こんなたわいもないことに興奮するとは。いや、ありさうもない中心をうつかりみとめてしまつた不覺さについてわたしは今度憤りはじめたらしいのだが、この日ごろの行動がまつたく愚かしく見え出してぼろりと齒の抜けた氣持になり、ついに立つてユラの名を呼び、そしてその聲がどうしたのかみづから豫期しなかつた愛情にみちてゐることに氣がつくと、にはかにユラがいとほしくなつて來た。二三度呼んだにも係らず、物音のする裏口といつてもつい近くの場所から返事をしようともしないユラの強情さにわたしはまた赫となりかけたが、いやこれは平常のそつけない調子になれてゐるせゐだと思ひかへしてこちらから出て行つて見ると、土間に立つてゐるユラの肩が懸命に反抗を示してゐ

るのにもはや疳のおさへやうもなく、平常そつけなくしてゐればこそたまの愛情には應ふべきはずだのにと、わたしはありあふ皿を取つてがちゃんと床にたたきつけた。ユラはひらりと身をかはし柱につかまつて蒼ざめた顔をこちらへ向けた。

「またはじまつたのね。」

「何がまたはじまつたもんか。ずつとつづいてるんだ。おまへのはうで氣ちがひ扱ひをよさないかぎり、おれの氣ちがひは直りつこないんだ。」

はじめからこんなユラを書くことはわたしひとりいい子にならうとする奸手段だと諸君は思ふかも知れないが、かう書いて來るとやはりこんなユラしか浮んでは來ず、さうでないがためにはユラの母親のはなしでもするほかはない。冒頭に述べたある老女といふのがすなはちそれで、かくはじめられた敘述の中ではもうそこからやり直すことが困難になつてしまつたのであるが、あたかもこのときまた縁側のほうへ引きかへしてぼんやり煙草をすひ出したわたしの眼前に去來したのが右の老女、數町はなれた新田の土地に住んでゐる母親の顔であつた。

當時わたしはこの母親のことを小説に書かうと思ひ立ち、それを末はめでたしめでたしで終るお伽噺にするつもりであつた。没落した一家が四方に離散し浮世の塵にまみれるといふ有り來りの卑俗な細部が寄りあつまつていつか一篇の夢物語を成すやうな書き方のことを考へたのだが、それといふのも能面に似た母親の顔を見てゐるといかなる感情をも漂白するその皮膚が内心の波風や日日の生活のうへにまで執拗に張りわたされるのが感じられて來て、かかる御籤を讀むやうな顔をわたしは何となく描いてみたい氣がした。小企業家であつた夫も財産もうしなつた老女が住みなれた市中から田舎の町に流轉して來て琴三味線生花の五目の看板を掲げどうやら暮らしのめどもつきかけてゐる今日、ちりぢりになつた三人の子供たちのうち大阪の某工場に勤めてゐた長男の左翼運動に係つて下獄中なの

何より苦勞のたねである。二番目のミサといふ娘ははじめ東京で藝者に出てゐたがやがて母親の居住地に近い磯町に住み替へて來て今ではある雜貨商の世話になり土地で藝者屋を出してこれはまづ一落著きといふところ。末の娘のユラは——ユラは街の酒場に勤めてゐるうちにある青年と同棲することになつたが、元來はたらくことのきらひな性で何をする料簡もなく、さりとて青年のとほしい財囊では都市の享樂を思ふままにできないので、ぢきに風邪を引く弱い體質をみづから肺病といひ立てて母親のそばに越したがり、青年も田舎住ひの氣安さに結句この土地に移り住むことにした。ところでその青年といふのが金もないのに毎日ぶらぶらくらしわけのわからぬことを口走り皿など割つてゐる目下の有様では、ユラはいつになつたら氣樂な身になれるのやら、わたしのお伽噺が完成する日はまづ望みうすであつた。

わたしは泥沼から足を引き抜くやうに立ち上り、座敷ぢゆうを歩きまはり、やがてまたごろりと横になると、いつの間にかそばに來たユラが「どうして。お臍がみつかつちやつたんですることがなくつてこまつてるんでせう。お皿もつと割るといいわよ。」と、くつくつと笑つた。これはわたしが常談に間歇的戀愛と呼んでゐたもので、わたしたちはときどきけろりとして意外なラヴシーンを演じてゐる自分たちを發見することがあつたのだが、さういふときのユラはたいへんあどけない娘になつてしまふ。今もわたしのほうでもそれに釣こまれて暢氣らしくユラの膝に頭をもたせなどしながら「ほんとに何かしなくちやいけない。ぐづぐづしちやあられない。」とすぐにもはたらき出しさうなことをいふと、「さうよ、ほんとにしつかりしてよ。ここに來てからしたことつていへば犬を飼つたぐらゐなもんぢやないの。」

その犬もここにはゐなかつた。磯町のミサが前からほしがつてゐたのだが、このあひだ來たときに「あんた方氣まぐれだから今にきつと倦きぢやふわよ。あんまり大きくならないうちに、あたしに下

さいよ」といひ、ともかく二三日借してとつれて行つてしまつた。それはわたしが大好きの友だちから譲り受けたボストン・テリアの仔犬でアルギウスと名づけたものであつた。ユリスの犬の名を取つたのは何もわたしがギリシヤの英雄を氣どつてみたわけではなくふと思ひ浮んだ名を附けたまでのことだが、後から臆測するとわたしはどうやらユラに於てベネロプを、貞淑な妻を見ようとする氣持がうごいてゐたのではないかと考へられもする。事實わたしはユラとともにアルギウスを愛撫しながらたがひに別別の感情で犬の皮膚を分割してゐること、いひかへれば若い夫婦が嬰兒に於て愛情を深めあふやうに犬の背中の上でたがひを愛撫する味がすこしも出て來ないことを覺つてちよつと宛のはづれた感じであつた。それゆゑにミサにくれといはれたときはつきりことわる氣がおこらなかつたのであらうか……その失望が今ユラの膝の上によみがへつて、この丸い肉塊の冷えはじめるのが感じられて來て、わたしはむつくり起きあがり「あの犬もういらんな。大體無精者そろひの家で何かを丹精しようといふのがまちがひなんだ。磯町でかはいがつてもらふはうがよからう。」といふ口調になり、そのときにはユラの顔もそろそろ硬くなりかけてゐた。わたしは机の上にあつたはがきに犬をやる旨を簡単に記し磯町の宛名を書いて「ついでのとときに出してくれ。」といつてさし出すと、ユラはいきなりそれを疊に投げつけ、思ひもよらない返事であつた。「いやよ。こんな使だれがするもんか。そんなにねえさんに逢ひたかつたら遠慮なく逢ひに行つたらいいぢやないの。」ミサのことについて嫉妬されるおぼえはなかつたし、愚かしい邪推をまじめに取りあふ氣はせず、ただ「ばか」といつたただけであつたが、これはこちらがすこし意地惡であつたかと思ひかへしてユラを見ると眼に涙をためて肩をふるはせてゐる様子に、こいつもなかなかたいへんやつたなど不思議にもわたしはユラに感心しはじめてゐた。

夕方庭に出て見ると、萩のみだれてゐる生垣のほとりに小さい犬

舎が置き放しになつてゐた。わたしはそれを寺の本堂の裏手へ持つて行き竹藪の中に捨ててしまつた。そしてその足で町のはうへ出て、かなり離れた郵便局まで行き、ミサ宛に犬をやるといふ電報を打つた。どうしてそんな氣どつた料簡をおこしたのか、わたしは歌のやうな文句をかきつけたのだが、その頼信紙を窓口にさし出したとき顔見知りの局員はさつと讀み下すとふふんといった様子でそつぽを向いて字數をかぞへはじめた。薄曇のはえた唇のにやりとしたのが見えるやうであつた。この土地でどうやら有名になりはじめたわたしの氣ちがひ説をこの男も信じてゐる一人らしかつた。

あくる日縁側の日向でわたしはわたしの手帖をひろげてゐた。ときをりの隨想を亂雜に書き留めた手帖でユラのことなども記してゐるのだが、わたしは隠さうともせず身邊に投げ出しておいたものだ。ユラは書かれたものに信用をおかないたちの女であり分けてもわたしの書くものなど氣にとめてゐなかつたので、その點都合ではあつたが、それよりももしわたしに祕密があるとしたならば隠せば隠すほどユラに見破られさうな氣がしたし、またわたしとしてもユラの眼をおそれるやうな眞似はしたくなかつた。

手帖の一節――

《自分の愛してゐるものの質が悪ければ、それを愛する自分の質も悪くなる。》レオナルド・ダ・ヴィンチ

今時分こんなことを讀まなければならないとは何たることだ。おれの眼で底まで見すかしてしまつたユラの中にまだ不透明な箇所があるとすれば、それは吸ひ取られたおれの血のかたまりよりほかのものではない。それが惜しいのだ。それの一滴さへとても惜しいのだ。おれが何かをすといふことは、まづユラをわが身から引き剝すことにはじまる。もつとも次のやうな文句をたれかが書いてゐ

たはずだ。——美しい仕方でなされればこそ美しいので、たとへつ
まらぬものでも優れたものと思ひなして愛したとすれば、それはや
はり美しいのだと。おれがどんな仕方でもユラを愛してゐるか一應そ
れは問題だらうが、ここでそんな詮索をはじめるのは《戀愛論》で
も著はさうとする赤の他人のおせつかいだ。當人のおれとしては、
今氣の立つてゐる矢先にかうしてレオナルドにおどかされてみる
と、醋の蕪弱の^{サビ}と捏ねまはしてゐるひまにおれの質がだんだん悪く
なつて行くとしたならば、何が美しい仕方だ、それこそ取りかへし
がつかないぢやないかと、このはうがよつぽど身にしみる問題なの
だ……

これは一週間ばかり前に書きつけたものだが、わたしは先を讀む
のをやめ、いい氣なものだと思つた。ユラがこれを見たとしたら
ば、それはこつちでいふことよ、あたしの質が悪いやうに見えること
すればそれこそあなたの悪い質が傳染つた證據ぢやなくつて、うぬ惚
れもいい加減になさいよといふかも知れないし、さうなればたがひ
の質くらべだが、それほどうぬ惚れてゐるうへからはなんのユラご
ときと見得をきるところであり、何もはじめから取り上げるには當
らなかつたことだ。げんにこの感想を記した日めづらしく金のはひ
ることがあつて、わたしは急にはしやぎ出し、つい街へ行つて
酒など飲み幸福な二人らしくふるまつたものだが、その間わたしは
ユラを引き剝すことを考へつづけてゐたであらうか。このやうにユ
ラへの愛について堂堂めぐりをしたといふのは結局わたしは彼女の
うちに快樂しか求めなかつたせゐではないかと諸君は注意するかも
知れないが、わたしとしては、ある美しい肢體の奥に高貴なるたま
しひが潜んでゐるとすれば、それにふれるためにはまづ肢體を愛撫
する……いや、こんなことを口走るのは愚劣の極みだ。それにして
も、ちよつと距離を置いて眺めると自分の感想がまるで他人事のや
うに見えるといふ意外さを（あるひは不見識を）當時わたしは平

氣で踏み越えてゐたのであるが、それには格別の仔細はなく、單に
わたしがそのことに全然氣づかぬままでゐたためであらう。

いつか背中にすり寄つて來たユラが、

「ね、あててみませうか、今なに考へてるか。」

「おれは今おまへのことでいつばいいだ。」

「ふうん、お待ちかね。」

昨夜の電報のことをはなしておいたので、おそらく今日來るであ
らうミサへのあてつけとすぐ判り、わたしはユラの肩をつかんで揺
りながら、

「おい、おまへのためにいつて聞かせるんだが、おれをからかふの
がおまへの趣味ならそんな惡趣味はやめにしろ。なんて品のわるい
はなしだ、見ろ、おれはおこることもできやしない。」

「あなたのことだと、あたしの占ひちゃんとおたるの。ただそれを
いつただけよ。あなた、あたしがなに考へてるか判る。」

「かうしていくら揺ぶつたつて、おまへからは何もこぼれやしな
い。本氣でやきもちをやいてくれるなら、おれも張合があるんだ
が。」

「あたし何か因縁つけてうんとやきもちやいてみようかと思ふの。
でもだめなの。力を入れるとくすぐつたくなつて笑つちやふの。」

このやうな會話はおよそ意味のないもので、わたしたちはかうし
て退屈を繪に描いてゐただけのことだ。それがまたわたしたちのフ
リルトの唯一の方法でもあり、わたしはふはふはと茶に浮かされた
やうになつてしまふのであるが、危険なのはその醒めぎはで、愚か
しい振舞をするのはいつもそのときであつた。しかしこの日はそこ
にミサが來合せたので、わたしはづきづきする全身のだるさを常談
にまぎらすよりほかなかつた。

「まさか」とミサのもつて來た煙草の罐を切りながら、「これ一罐
ですませる氣ぢやあるまいね。あの犬とても高いんだぞ。」

「わかつてゐるわよ。濱村も（と雜貨商の名をいつて）何かお禮しな

くちやといつてたわ。」

「それちや氣ちがひに附ける藥でも買つてもらふか。」

「また」とユラが、「氣ちがひ氣ちがひつて。」

「それをいひ出したのはおまへちやないか。おまへこそおそれるべき宣傳の火元だ。」

ある日わたしは朝寢の床に寢そべつたまま何かどなつてゐるところへ、おしやべりの酒屋のかみさんが用を聞きに來て、狭い家のことですぐけどられてしまつた。わたしは襖越しに裏口のひそひそばなしを聞くことができた。――檀那さま、どつかお悪いんでせうか。ええ、うちすこし病氣なんですの。まあ。――氣の毒さうな顔をして見せた相手に對し、ユラはそれが癖の風にうそぶくといつたかたちで小鼻をひくひくとさせてゐたに相違なかつた。このあたりの寺では軽い精神病者を預ることがめづらしくなかつたので、病氣といへばすぐそれであつた。

「あたりまへよ。なんでもないので氣ちがひだと思はれた揚句、いえさうぢやございません、あの氣ちがひじみたところが生地なんでございますといちいちことわつて歩けやしないわ、みつともない。ほんとの氣ちがひのはうがましよ。」

「そりや、あなたがよくないのよ。」とミサがわたしにいつた。「妙な恰好をしてのそのそ外を歩いたり、ひとが挨拶してもそつぽを向いたり。土地のひとがみんな氣ちがひに馴れてるもんだから、ぢきにさうぢやないかと思はれるわよ。」

「みんな馴れてるんなら、氣ちがひの見分けがちやんとつきさうなものだ。この邊に來てゐる病人は大概おとなしいやつばかりだ。おれがへんだとすりや、それこそ正氣のしるしぢやないか。」

「もうそんなはなしやめるのよ。あたしがお藥あげるつていつてるぢやないの。ね、お酒、お酒。どつかへ出かけませうよ。」

まだ時刻が早かつたので、ユラは鏡臺の前で髪を直しながら、縁先に出たミサとむだばなしをはじめた。ななめにこちらへ半身を向

けたミサの帯から腰にかけて日がさしてゐるのをわたしは何となく眺めてゐたが、びつたり肌に貼りついた結城の單衣の薄藍がうぶ毛のやうに光るのに、もうミサのからだの丸みを想はずにはそれが見てゐられなくなり、われにもなく狼狽して急に視線をそらすと、ユラは鏡で顔は見えなかつたが普段著の銘仙の膝のあたり行儀わるく居くづれて素足を横ざまに投げ出してゐた。わたしは頭の芯がつんとするほどえたいの知れぬ憂鬱に緊めつけられ、その場にゐたまれず、たれにともなくちよつと本を返して來るといつて、寺から借りてあつた本を取りあげて外へ出た。いつもの通り本堂の裏を抜け、夕ぐれは早くもひえびえとする竹藪のほとりを風に煽られる古紺の裾から瘦せた髓をあらはして、《門ヲ出デテ佳人ヲ望ム佳人豈ココニ在ランヤ》などとひとりごとをいひながら通り過ぎて行くわたしはまことに女どもの相手をするよりも田舎寺の住持を訪れるにふさはしい姿であつた。

その晩三人で附近を通る私營電車に乗り、ある川魚料理のうちへ行つた。ミサは三味線を借りて小唄などうたつたが、わたしはミサの指がしなやかに絃の上を走り袖口がひらひらと腕にまつはるのを美しく眺めてゐた。こんなことは他人にとつては何の變哲もないはなしで諸君はふんと嗤ふかも知れないが、しかしわたしはかかるありふれた光景をさへものめづらしく眺めるほどユラのそばで粗野に馴らされてしまつたのであり、いひかへればユラはそのそばに近づくたれでもをいつか行爲の荒さでいづばいにしてしまふやうな女であつた。あたかも重荷を負うて道を行く苦力のごとくわたしはどんなつまらぬ野の花をもわが身に遠く見て過ぎるやうにしつけられてしまつたのであるが、それこそどうやらわたしが生れつきもつてゐるらしい苦行者の精神に詠へむきのことなので、その點については毫末もユラを怨む筋合はなかつた。さりながらその精神は今やわた

しの息の根を止めようとするほど癡猛な相を示し来り……だがここに苦行などと勿體ぶつたことをもち出したとたん、わたしのいふことは無慙にも支離滅裂になりかけてゐる。そもそもわたしの苦行とはいかなる義にかなふものであつたのか、いづれの道のための精進であつたのか、わたしは何か途方もなくめちやくちやなことをわめき出しさうな氣がする。といふのは當時わたしは魚のやうにただ漠然と生存してゐたまでのことで、ことばの筈にかけて思念の粒を漉すはおろか、どんな思念の粒もたまりえないほど頭の袋の底が抜けてゐた有様であつたから、今その狀態を氣のきいたことばにまともて一口にいつてのけようとする、役者が見得をきるにふさはしいやうな大仰な文句しかつかまらず、それらの文句を片端からならべてみたところで深淵に投げこむ小石同然ばかんぽかんと空疎雜駁なびきを立てるばかりであらうし、結局わたしが物笑ひにも逆上のていを示すに終るであらう。おそらくわたしは眞赤な顔をしながら諸君の前におじぎをしてこの邊で引きさがるのがよいであらうが、ここまで書いて來たといふことがわたしにそれを不可能にさせてしまつた今となつては、もう一切小ざかしい講釋の裏打はやめにして、あたりに氣がねをせず、その魚のやうな漠然たる生存とはどんな恰好のものであつたかを臆面なく書きつづけるよりほかはない。

その夜遅くミサと別れ、電車から家までの途上をわたしは人氣もない闇の中にユラとならんで無言のまま歩いて行つたが、じつはユラが何かはなしかけたかどうか、そばにゐたかどうかさへ上の空であつた。かういふとわたしがある考に没頭してゐたかのやうであるが、さて何を考へ……いや、そんなことよりもわたしはそのときちよつと立ちどまつて呼吸したことをいはう。わたしは道のまん中で胸を張つてふうと一息吸ひこみ、をりからの夜風が水のやうに肺臓に流れこむのを感じながらなほそれを吸ひつづけた。酒に酔つてゐたせゐもあらう、わたしは風が肺臓にあふれ體内に満つるのをは

つきり感じたのだが、それはふとわたしの裡に忍び入つた啓示のやうなものであつた。それだけの分量の風を受け容れるためには何があつたか。——空虚。さうだ、空虚。わたしは空虚でいつばいいのだ。わたしといふものがそもそもがらんだうなのだ。わたしは風の中にただよひ夜の闇の中に融け入つてしまつた。今わたしの皮膚は空氣を吹きこまれたゴムの薄皮でしかなく、それと覺つたときにはもう遺瀨なくふくれるままの成行となり、かうしてこの夜ふけ床の上で眠つてゐるユラのそばによこたはつたわたしは音も立てず張り裂けて宙に消えるばかりであつた。わたしはいつかステイグマタイゼエション（聖痕示現）のことを考へてゐた。アッシジの聖フランチェスコがイエスを念ずる心深きに依り掌に十字架上の聖痕、主のおん手に打たれた釘痕がまざまざと顯はれたといふあのはなしである。わが身をがらんだうと思ひこむ一念は今や信仰となつたのであるが、それを手輕に阿呆の沙汰とかたづける利口面こそおよそ齒がゆくてならなかつたもので、わたしがこの鰯の頭の信心に凝りかたまつたといふよりもそれはもうどうにも退引ならぬ神格を現じ、わたしは神懸りのままに引廻される巫女にほかならず、しかも《壇ヲ堪シテ以テ器ヲ爲ル其ノ無ニ當ツテ器ノ用アリ》と老子に説かれてゐるやうな物の用をなすところの無はわたしの考へうる限りの無ではなく、何の役にも立たない無、例へば地の裂け目、木の割れ目、空洞……空洞こそここにわが念ずる神の姿となつて顯はれ、かくて、わたしにあつての聖痕示現はまさしくこの現身のわたしといふものが空に畫いたうつろの枠の中にぞつくり嵌りこむことでしかなかつた。——それはつまり死について考へてゐることだと覺るのにしばしの合間があつたほど死の觀念はそのとき非常にゆつくりわたしの忍び寄つて來て、そしてそれが來たときにはもうわたしがおどろくはずはなく、むしろとうとうと夢みごちちになるやうななかやかさであつた。ここでわたしは諸君にお願ひする、どうか自殺などといふ殘忍なことばでわたしをおびやかさないで下さい。わたしは

そのことばを呪詛と恐怖とを以てしか記すことができない。わたしはみづから殺すといふことは思はなかつた。つい、ばつたり死ぬ。しかし重要なことは、わたしは死につつ死ぬことを意識してゐなければならなかつた。かの催眠薬に依つてまづ眠に入り眠から死にながらうとするやうな死に方はわたしにとつて死ぬことではなかつた。剣尖が肉を裂き骨を斷つを感じつつ、彈丸が腦髓に食ひ入るのを感じつつ、わたしは明らかなる鏡の中にわが最期を見とどけなければならなかつた。

わたしは眠つてゐるユラの額の上を打診するやうに軽く指先で叩きながら心につぶやいた。——おまへもかはいさうなやつだ。おれは色魔のやうにおまへを捨てるわけぢやないが、ただおれがふくらがつてしまつたのでおまへがはみ出されることになつたのだ。だが何がかはいさうなものか。おれがゐなくなれば、おまへはそれこそ羽根を伸ばして暢暢とするだらう。つい指先に力がはひつたのかユラは薄眼をあけて「何してるの」といひ、それからばつちり眼をあけた。

「あたし今夢みてたのよ。途中で切れちやつたわ。どんな夢だか判る……（わたしが黙つてゐると）あのね、濱さん（と濱村のことを呼んで）といつしよに映畫見に行つた夢なの。あたしと濱さんと二人で淺草みたいところへ行つてシネマにはひつたのよ。スクリーンに男のひとが一人出て來て林の中で下を向いて何だか考へこんでるの。すると大寫しになつて顔をあげるとそれがあなたぢやないの。濱さんが、おいおい、こわい顔をしてこつちを睨んでるぜ、早くそばに行つてやつたらよからう。いいのよ、かまやしないわ、あの人ひとりでああしてるのが好きなのよ、うつちやつとくはうがいいわ。と、いつの間にかあなたに繪から抜け出してあたしの前に立つて睨みつけてるの。まるでコンラッド・ファイトみたい。ふん、ちつともこわかないわよ、そんな顔して見せたつて。こんなひとなかであたしに恥をかかせるつもり。あなたがどこへもつれてつてく

れないから濱さんといつしよに歩くんぢやないの。それがどうしたのよつていふと、あなたが手にもつてた木の枝の折れたのであたしの頭をこつこつ……」

このおしやべりは半分はでたらめであつたかも知れないが、ユラが濱村と映畫や芝居を見に行くのはめづらしいことではなかつた。わたしはついぞ誘ひに應じたためしはなかつたが、ユラはわたしの放任するままにいつも出かけて行き、ときにはミサがいつしよでなくとも平氣で遊びまはり、かへつて來ると何座の出し物とかどこそこの鰻とかそんなはなしをおもしろさうにわたしにして聞かせるのが常であつた。わたしは夢のおさらへを聞きながら、さうだ、ほんとにユラのやうななまけもののくせにちつと坐つてゐられないたちの女は血と肉で張り切つてゐる濱村などにこそふさはしいのだと、何の惡意もなくさう思ひ、それを常談のやうにいつた。

「まつたくおれとは釣合はないんだ。こんど淺草へ行つたら占ひに見てもらふがいい。おまへがひりひりして鹽の性なら相性は豚にきまつてる。こりやどうしても濱村の役どこだ。二人ならんだところはとんだ似合の御夫婦だな。」

深夜の靜寂の中で調子がしんみりしたせゐか、それはもう常談にはひびかず、ユラはさつと顔色が變つて「あなたそのつもりなのね、あたしを、あたしを濱さんに押しつけて……」と半身を起しかと思ふと、枕もとにあつたコップをつかんでいきなり疊に投げつけた。いきほひのあまりコップは疊の上にはずんでそばのスタンドのはうへ跳ねかへりあやふく玻璃筥にぶつからうとしたので、とつさにわたしは手でさへぎつたが間に合はず、筥はそれたものの金屬の臺に當つてがちゃんど割れ破片がわたしの手を傷つけた。傷はほんのかすつただけだが血がにじんで來た。わたしはすこしも激昂せず、怒をおさへたといふよりも怒がこみ上げて來ることなく、しづかに立ち上り戸棚から藥を出して手當をしながらあやしい沈黙のうちにやはりわたしの考をつづけてゐた。それは決してユラのことや